

# 舞 謠 雜 話 (一)

古 市 公 威

十四日の囃子方演能の養老を除いて後の四番は悉く見た。

□何れも大した事はなかつた様だが、それ／＼相當の出来であつたとは言へるだらう

□萬三郎の妻上も特に感した事はなかつた。決して悪い出来だといふのではない、萬三郎として普通の出来だつた様に思ふ。同人には目下家族に大病人があつて、非常な心配をして居る、私は萬三郎が出勤するか何うかを疑つてゐた程であつた。それを推して勤めたのだから大いに同情を表さねばならぬ。

□心配を心に持つて居ると、それが藝の上に出るものですなアと言つた。萬三郎と自分を比較する譯ではないが、先年私の母が重病に罹つた時の事であつた。梅若の舞臺で翁の稽古をする

と故人實が、御心配事がありますと、何うしても藝の上に出るものですなアと言つた。謠の調子が清らかに澄まないといふ様な事を言つて居た。

□喜多の舟辨慶も眞の傳といふ小書附であつたから特に興味を惹かれた。然し豫期があまりに大きかつた爲でもあらう、後シテなどはもつと鮮かであるかと思つて居た。小書から起る變化は先づ觀世流の前後の替とあらまし同じ様に思はれた。觀世では聲をしるべに出舟のと地が謠つてから早笛になり、シテの出た所で返しを謠ふのだが、喜多のは思ひも寄らぬ浦波のシテの謠が濟むと直ぐ早笛になつて、聲をいへるべにの返しの方だけを謠つた。非常に心持よく思つたのは、幕の下ろし方であつた。あゝいふ風にスカリと幕を下ろすものは見た覺へがない。兎角瀟然と浪に沈んだ様に見へた。

□求塚は好い曲である。あんな名曲を觀世流では何故廢曲として了つたのだらう。誠に残念な事である。長の出来については、極めて着實な藝風であるから、別にこれと云つて取り立てゝ云ふ事はない、唯觀世流に若し此曲があつたとすれば、あすこをあゝはすまい、恐らくこうだらうといふ様に思つた箇所は幾らかある。同じ上懸であるが行き方の違ふ所がある様に思はれる。勿論善悪を言ふ譯ではない。

□六郎の弱法師は極めて素直な出来であつたと思ふ。いつも修行を受けた左の袂の端を左の手に握るがあの日はそれをしなかつた。全體あすこはしない方が好いと私は前々から考へてゐた所である。

口是について話がある。先年亡くなった藤田傳三郎氏は生一左兵衛の非常な崇拜者であつた。左兵衛は日本一の能役者で、その右に出づる者はない、實などは物の數でもない確信してゐた人だから、私と會へば議論が初まる、一度などは山縣公の仲裁で物別れになつた事もあつた。所がこの生一左兵衛が又非常な自信家で、京都で豊公の三百年祭の能があつた時、生一が弱法師を勤める事になつた。その時の觸れ込みが、清又五郎に習つた形で勤めるとの事であつた。然るに生一の江戸に來たころは又五郎の勢力は非常なもので生一などに直きに稽古をすることはなかつたと私は聞て居るから此の觸れ込みが私の頭に劇しく響いた。不快な感情を頭に置いて見たのだから、その日の弱法師が面白く思はれ様苦がない、又實際上出來とは言へなんだ。盲杖のつき方、天王寺の石の鳥居の形、左杖のつかひ方、貴賤の人行逢の形などは又五郎が教へたとは如何にしても思われなんだ。

口然るに此弱法師の中で唯一つ面白く感じたのは、初同の内に左の袂の端をつかむ事をせなんだ事である。由來上方では兎角型が多くなるやうに思ふが、東京でする型を上方で省くのは珍らしいやうに思ふ。而して前記の型は何方かといへば省いた方が宜いかと常に思つて居た所である。其後歸京して清廉に、袂を取る型は何時頃から始まつたかと訊ねたら、以前からあつするやうに思つて居ますとの返答であつた。實老人には訊かなかつたが、東京では左様するものと自分は思つて居た。然るに今度六郎のを見て東京にも袂を取らぬ型がある事を知つた。取らなくても宜いものなら自分は取らない方に賛成する。

口切のロンギの「こは夢か」とて「が餘り突然のやうで、驚いて自分に質問した人もあつた。然しあれは確かに流儀の型で、實老人もあつたし、自分にもあつて教へてくれたのであつた。唯氣の懸り方の強弱は多少あるだらうが、全體に於てあの氣合であると思ふ。然し是も前の袂の問題と同じく、あれ迄になくても濟む事ならば、其方を賛成したい。凡て流儀の事は徹頭徹尾税難を許さないものとは思はない然し其流儀を汲む者は絶対に服従する外はない、能評記者の論に對して「あれは流儀の型で」と抗辯する人は多いが、夫にしても藝術的評論をする人は左様いふ事は問題ではあるまい。今少し自由なものであらねばなるまいと思ふ。

例へば、今の「こは夢か」とて「の所なども、前の「そも通俊は我父の」以下の數句で、既に事情が分つて居るものだから此句で突然に驚く表情をす可きでないといふやうな説も成立つてあらう。とは言ふものゝ、數百年來洗練に洗練を加へて來た斯藝の事だから、仲々迂濶な事は言へない。小し不服はあつても流儀の型を悪いといふやうな大膽な斷定は決して出來るものではない。(文藝の記者に在り)

# 四 番 の 能 の 印 象

河 東 碧 梧 桐

## △ 能樂滅亡論について

二月十四日の能の短評をする前に、先月の能樂に出た佐々君の能樂滅亡論について一言したい。

一體私は佐々君とは高等學校時代からの喧嘩のお相手で、俳句の事について同氏とは大議論をした事もある程で、私と同君とは何處までもソリが